

7) 景観

本市は、筑後川や筑紫平野、耳納山地など豊かな自然環境に恵まれ、これらの自然環境は人々に多くの恵みをもたらすとともに、四季折々の姿を見せ、様々な歴史文化を育んできました。この中で人々は都市を形成し、そこには生活空間としてのまちなみが広がっており、本市には自然や歴史・文化、まちに関する特有の景観が、市内各所に広がっています。

久留米市景観計画（平成23年（2011年）策定、令和元年（2019年）更新）では、本市の景観特性を、山並みや河川、農地や樹林や樹木で構成される「自然景観」、史跡や寺社、旧街道や伝統的まちなみなどの歴史資源、地域固有の文化資源などで構成される「歴史・文化景観」、市民の生活空間である住宅地や商工業地、公園や道路、公共施設等で構成される市街地の景観としての「まちなみ景観」の3つの特性にまとめています。また、景観特性を捉えるにあたっては、本市は青木繁^{あおきしげる}（1882年～1911年）、坂本繁二郎^{さかもとはんじろう}（1882年～1969年）、松田諦晶^{まつだていしょう}（1886年～1961年）、高島野十郎^{たかしまやじゅうろう}（1890年～1975年）、古賀春江^{こがはるえ}（1895年～1933年）など、多数の芸術家を輩出していることから、「絵画に描かれた久留米の景観」を視点として取り上げています。本市には、多数の芸術家を輩出する風土が根付いていると同時に、芸術を創出する美しい景観が広がっていると言えます。

①本市の景観特性

●自然景観



筑後川



屏風のような耳納山地



筑後川沿いの田園風景

●歴史・文化景観



久留米城跡



寺町



旧三井寺ポンプ所及び変電所



城島の酒蔵



恵利堰



筑後国府跡

●まちなみ景観



明治通りのイルミネーション



石橋文化センター



緑豊かな住宅地



筑後川と工場群



ブリヂストン通り



池町川緑道

②絵画に描かれた久留米市の景観



月下滞船図（青木繁）



水縄山風景（坂本繁二郎）



篠山城跡の桜（松田諦晶）



筑後川遠望（高島野十郎）



筑後川（古賀春江）

出典：『青木繁・坂本繁二郎生誕 120 年記念 筑後洋画の系譜』図録

（平成 14 年（2002 年） 石橋美術館）

(3) 歴史的環境

本市は、筑後川の流れに育まれた自然環境に恵まれ、筑紫平野の中央に位置することから、古くから人々が行き交い、集まり住み始めた所です。数多くの歴史的物語が生み出され、現在も様々な歴史遺産や文献、口承等が伝わります。ここでは、本市の歴史文化の成立に関わる主な歴史上の出来事を紹介します。

1) 旧石器時代～縄文時代 「豊かな水と狩猟採集の時代」

本市に人々が暮らし始めたのは、約 29,000 年前の旧石器時代まで遡ります。日本列島の旧石器時代の人々は、「最終氷期」の約 38,000 年前頃に住み始めたと考えられており、現在よりもはるかに寒冷な環境で生活していました。本市で見つかった旧石器時代の遺跡は、標高約 25 ～ 50 m の丘陵先端部や中位段丘上、または標高約 8 ～ 10 m の自然堤防上の微高地に多く立地します。上津町や合川町、山川町などの耳納山地から筑後川へ注ぐ河川の流域に多く、水資源の豊富な場所に集まる動物を獲っていたと想像されます。石器の石材には、市内では採取できない佐賀県多久市・小城市などの安山岩、佐賀県伊万里市などの黒曜石が用いられており、車地遺跡（上津町）、野口遺跡（山川町）、北宇土池遺跡（上津町）からは、瀬戸内海周辺の地域でみられる瀬戸内技法の影響を受けたナイフ形石器が見つっています。



市内出土の旧石器



野口遺跡の出土遺物



正福寺遺跡出土のアミカゴ

約 19,000 年前に気候の温暖化が始まると、定住生活が普及し、土器が発明されるなど生活様式が変化し、縄文時代へと移行していきました。狩猟に加え、採集や漁労を行うことで人口が増加し、本市でも遺跡数が飛躍的に増加しています。野口遺跡(山川町)で発見された土器は、西北九州の土器にみられる特徴を持ち、「野口式土器」と呼ばれています。また、本市は西北九州一帯に広がる文化圏に属する一方で、市ノ上北屋敷遺跡(合川町)では瀬戸内地方に多く分布する船元式土器が出土しています。石器の石材は、大分県姫島産、佐賀県腰岳産などの黒曜石、佐賀県多久市・小城市などの安山岩、野口遺跡出土の蛇紋岩製石斧は、大分県佐賀関半島、もしくは長崎県野母崎半島など、遠方の石材を使用しています。石器は日常的な道具のほかに、祭祀に伴う呪術的な道具といわれる遺物もあり、正福寺遺跡(上津町)からは大珠^{たいしゅ}※、有孔円盤^{ゆうこうえんぱん}※、西小路遺跡(東合川町)からは石棒^{せきぼう}・石冠^{せきかん}※が出土しています。人々の生活の様子を知ることができる遺跡としては、縄文時代後期に営まれた正福寺遺跡があげられます。谷部から多

【用語解説】

※大珠…緑色の石材で細長い形態をした珠(たま) ※有孔円盤…偏平な石を円形に加工し、中央に穴をあけたもの

※石棒・石冠…ともに子孫繁栄を願った祭器とされ、石冠は冠に形状が似ているとして名付けられた。ともに西日本での出土例は少なく、東日本に多く認められる

量のドングリやアミカゴ、木製品、種子や骨、虫などが出土しており、ドングリを食料として重視し、イノシシやシカといった動物を獲って生活していたことが推測されます。

2) 弥生時代 「筑後川の恵みと豊かな文化の実り」

水稻耕作に代表される弥生時代には、それまでの狩猟採集社会から米をはじめとする生産経済に移行し、大きな集落が形成されていきました。九州最大の平野である筑紫平野は、筑後川周辺の丘陵地を流れる河川の沖積作用等により、弥生時代末（約 1800 年前）までにおおよそ形成されています。その中央に位置し、水資源に恵まれた本市では、高三瀨遺跡（三瀨町）、道蔵遺跡（大善寺町）、塚畑遺跡（安武町）、大林遺跡（合川町）、良積遺跡（北野町）、水分遺跡（田主丸町）など、筑後川沿いに多くの拠点的な集落遺跡が見つっています。埋葬施設も多く発見されており、支石墓^{しせきぼ}*や石棺墓、木棺墓、土壙墓^{つこうぼ}とともに、北部九州に特徴的な甕棺墓^{かめかんぼ}*も数多く見つっています。

農業生産が拡大すると、農耕社会特有の耕地や水利、蓄積された富をめぐる村落間の争いが生まれたと考えられ、塚崎東畑遺跡（三瀨町）からは石鍬が打ち込まれた人骨が、石丸遺跡（櫛原町）からは戦いに使用した石剣が見つっています。また、集落の周囲に濠をめぐる環濠集落が、高三瀨遺跡、道蔵遺跡、水分遺跡などで見つかりました。貧富の差も生まれ、銅剣が二口発見されたとされる御廟塚貝塚（三瀨町）、甕棺墓の中に銅鏡や装飾品が副葬されていた良積遺跡など、貴重な品を所有した人物が現れ、『魏志倭人伝』に伝わる「クニ」が出現していったと考えられます。

また、弥生時代には朝鮮半島から多くの人々が北部九州に移り住んだと考えられており、本市でも仁王丸遺跡（北野町）や久保遺跡（城島町）、高三瀨遺跡から朝鮮系の土器が出土しており、その影響がみられます。特に久保遺跡、高三瀨遺跡から出土した擬朝鮮系無文土器^{ぎちようせんけいむもんどき}*は有明海沿岸の遺跡で多くみられます。一方、日本列島内での動きも活発になります。旧石器・縄文時代と同様に安山岩や黒曜石を利用するだけでなく、飯塚市立岩産の輝緑凝灰岩^{たていわ}を用いた石包丁や福岡市今山産の磨製石斧が広範囲に広がり、久留米でも多数出土しています。弥生時代の後半になると、より大規模な拠点集落^{かいてんしゅうらく}*が増え、金属器やガラス製品などの貴重品も多く出土しています。また、道蔵遺跡、良積遺跡、水分遺跡などでは、熊本地方、瀬戸内地方、近畿地方などの特徴をもつ土器が出土しており、広い範囲で人の動きがあったことが想像できます。

筑後川流域は水に恵まれ、水稻耕作に適しているだけではなく、水運を利用して他地域と



良積遺跡の出土遺物



石丸遺跡

【用語解説】

※支石墓…ドルメンともいい、支石を数個、埋葬地を囲うように並べ、その上に巨大な天井石を載せる形態の埋葬施設

※甕棺墓…甕や壺など、大型の土器を棺として用いる埋葬施設。北部九州に多く分布する

※擬朝鮮系無文土器…表面を磨き、黒色に変化した土器。朝鮮半島の土器の特徴を持ちながらも、そのものではないものをいう

※拠点集落…一般的な集落よりもはるかに大規模な集落。金属器や、ガラス製品などの貴重品が多く出土する

も交流しやすい環境にあったようです。こうした中で拠点集落[※]が形成され、有力者を生み出していきました。

3) 古墳時代 「筑後川を介した対外交流と豪族の成長」

筑後川の恵みがもたらした農耕社会の発展は、複数の集落を束ねる有力者を生み出していきました。彼らは小地域を統括する地方豪族として成長し、畿内をはじめとする各地や朝鮮半島などと交流を行いました。本市には、筑後地方最古と言われる祇園山古墳（御井町）が高良山西麓に築造されていることから、いち早く豪族が成長する要素が備わっていたことが分かります。その後、市内各地に古墳が築かれるようになりますが、中でも耳納山地西麓の藤山町・高良内町・上津町付近には、古墳時代中期を中心に約100年間に及び、前方後円墳[※]が築かれています。また、本市南西部の旧三潞郡に含まれる大善寺町付近は、『日本書紀』に登場する「水沼君」の本貫地と考えられています。三潞郡一帯は有明海と筑後川の接点に位置し、筑後地域における大陸の玄関口という重要な役割を果たしていました。有明海と筑後川を舞台に活躍した水沼君が埋葬されたと考えられるのが、御塚・権現塚古墳（大善寺町）です。水を湛えた二重、三重の周溝、新羅土器[※]の出土などから、畿内や朝鮮半島との関わりが窺えます。

本市の古墳時代の特徴として、5世紀後半～6世紀代の装飾古墳があげられます。装飾古墳とは、埋葬主体の石室や石棺に彫刻や彩色によって幾何学的な文様や、船・鳥・人物などを描いた古墳のことで、全国にある16万基以上あるとされる古墳のうち約600基しか確認されていない貴重な古墳です。本市には8基ほどが現存しています。

筑後川流域のうきは市、大分県日田市・玖珠郡でも確認されていますが、筑後川流域に装飾古墳が集中して分布していることは、筑後川を介して装飾古墳文化が広がったことを示しています。装飾古墳には舟が描かれたものも多数認められ、筑後川を利用した水上交通との関連が想像できます。

古墳時代後期には、日本史上重要な出来事も起きています。継体21年（527年）の「筑紫君磐井の乱」です。本市の南に位置する八女地域に拠点を置いた筑紫君磐井が、大和政権と戦い、1年半に及ぶ戦いの最後が、本市の御井郡（御井町付近）で行われたとされています。この結果、磐井は敗北し、乱後、大和政権に近い中央豪族が筑後地域に進出しました。高良山麓に築造された隈山古墳群（国分町）や大谷古墳群（高良内町）、岩竹古墳群（高良内町）



御塚・権現塚古墳



寺徳古墳



隈山2号墳の山柵玉

【用語解説】

※前方後円墳…円形と方形の盛土を接続した平面形が鍵穴の形をした古墳。首長など上位階層の人物が葬られた

※新羅土器…朝鮮半島の三国時代と統一新羅時代に生産された硬質の土器

からは、畿内との関わりを示す副葬品が出土しています。交通の要衝でもある高良山西麓に中央豪族が進出したことにより、当地が古代筑後国の中心地として発展していくこととなります。

4) 古代「立地を生かした筑後国の拠点」

7世紀ごろの東アジアは、中国を統一した唐が周辺諸国へ軍事介入したことから、情勢が不安定な状態でした。朝鮮半島では、百済が唐と新羅により滅ぼされ、百済再興の援軍を依頼された齊明天皇は、出兵のために朝倉橋あさくらたちばなのひろにわのみやの庭宮（朝倉市）に遷都しました。しかし、663年に白村江の戦いで大敗し、さらに唐・新羅による侵攻の恐れがありました。国防の最前線に位置する北部九州を中心に、防衛施設が建設されていきました。大野城や基肄城などの古代山城や水城の建設、烽火とびひの設置、防人さきもりが配置されています。有明海からの侵入を想定すると、有明海から筑後川をさかのぼれば筑紫平野に至ることが可能で、大宰府や朝倉橋広庭宮にも到達することができます。耳納山地と背振山地との距離が約5kmしかない本市付近は、筑紫平野の玄関口とも言える軍事的な要所で、高良山には高良山神籠石（御井町・山川町）が、主要な陸路沿いには上津土塁跡（上津町）が、筑後川沿いの低位段丘には筑後国府跡「前身官衙」（合川町）が造営されています。唐と新羅との関係は急速に改善され、侵略を受けることはありませんでしたが、この後、「前身官衙」を踏襲して筑後国府が設置されるなど、当地が筑後国の中心地として発展していくこととなります。



高良山神籠石



筑後国府跡

この時期、本市付近は未曾有の自然災害に見舞われています。『日本書紀』天武7年（678年）12月条に記載されている「筑紫大地震」です。耳納山地の北麓に沿って東西に走る水縄断層帯が震源とされ、山川前田遺跡（山川町）ではその一部が確認されています。マグニチュードは7.1と推定されおり、その影響と考えられる液状化の痕跡や地割れ痕などが、市内各地の発掘調査で確認されています。なお、筑紫大地震を記した同記事は、日本最古の地震記録として知られています。

7世紀は、天皇を中心とする中央集権国家の建設が急がれた時代でもありました。領域的支配を可能とするために評（郡）が設置され、人々を直接支配するために戸籍が作成されました。全国は60余りの国に分けられ、本市は筑後国に含まれます。筑後国には筑後国府（合川町・東合川町・朝妻町・御井町）という行政機関が設置され、国府には役人である国司こくしが都みやこから派遣されてきました。国内には大宰府や各地を結ぶ西海道さいかいどうなど道路網が整備され、筑後川の水運も利用して人や物が行き交いました。上牟田遺跡かみむた（諏訪野町）や車地遺跡（藤光町）などでは、西海道跡が確認されています。また、8世紀中頃には、不安定な社会情勢

【用語解説】

※烽火…煙や火を使って、遠く離れた場所へ情報を伝える伝達手段

※防人…北部九州の沿岸を警固するために配置された兵士。東国などからも徴兵された

※『日本三代実録』…古代の日本国家が編纂した正史。清和天皇、陽成天皇、孝徳天皇の時代（858～887年）が記載されている

を改善しようと「国分寺建立の^{みことのり}詔」が発せられました。筑後国分寺・国分尼寺は、本市の^{こくぶ}国分町に造営されています。筑後国府跡の発掘調査は昭和36年（1961年）から実施されており、全国でも稀有な3度におよぶ^{にほんさんだいじつりく}国庁の移転や、『日本三代実録』^{みやこのあそん みとり}※にみえる筑後国司都朝臣御西の殺害現場と想定される国司館の発見など、古代都市筑後国府の姿を明らかにしてきました。筑後国府は、発掘調査により12世紀後半まで存続したことが判明していますが、南北朝争乱期に^{かねなが}懐良親王が筑後国府に陣を置いた記録が残されており、15世紀まで存続していたと考えられます。筑後国府の設置により、筑後地域の中心として本市が発展していく基礎が築かれたと言えます。

5) 中世 「新たな政治・経済・文化の創造と騒乱の時代」

古代末期、武士の台頭と源平の戦いを通して武家政権が樹立しました。地方に根を下ろした新興勢力は、新たな政治・経済・文化を創造していきました。

鎌倉時代には、耳納山地の北麓に草野氏、京都の^{ほうしょう}宝荘^{ごんいん}巖院^{いん}※を本所とする三瀨荘に横溝・西牟田・大隈・荒木氏などの御家人が台頭します。高良山の社寺勢力は古代の国分寺にかわる存在となり、中世の変動期に新しい対応・発展をみせています。中でも草野氏は大きな力をつけ、文治2年（1186年）、筑後国在国司^{ざいこくし}※・押領使^{おうりょうし}※に任じられたことが『吾妻鏡』^{あづまかがみ}※に見えます。竹井城（草野町）を拠点に城下町を整備し、臨済宗千光寺（現曹洞宗、山本町）や浄土宗善導寺（善導寺町）など、積極的に新興仏教勢力を保護し、耳納山地北麓の中世文化の開花に大きな役割を果たしました。また、高良山衆の一人、^{くましroyしただ}神代良忠は蒙古軍撃退のため北上してきた肥後・薩摩勢を通す筑後川最古の架橋である神代の浮橋（山川町）を設置したことが知られています。

南北朝期には宮方と武家方で騒乱が生じ、筑前・豊前・肥前・壱岐・対馬の守護である^{しょうじ}少弐氏と肥後の守護であ



筑後川合戦図



大友宗麟朱印状(小川区有中世文書)

【用語解説】

- ※宝荘巖院…長承元年（1132）、京都の白河に建立された寺。皇室の祈願寺として隆盛を極めた
- ※在国司…都から派遣されてくる国司に代わり、現地登用された役人（在庁官人）のうち、最高有力者
- ※押領使…諸国の治安維持にあたった軍事官職
- ※『吾妻鏡』…鎌倉時代に成立した歴史書。治承4年（1180）～文永3年（1266）までを記す

草野氏

草野氏は平安時代末期から安土桃山時代に活躍した一族です。草野永平は、源頼朝によって筑後国在国司職・押領使職に推挙されています。草野氏は、その後も元寇や南北朝の騒乱時に活躍し、竹井城や発心城を居城としました。「絹本著色若宮八幡宮縁起」にはその城下町の繁栄ぶりが描かれています。戦国末期に滅亡しましたが、本拠地であった現在の草野町に草野氏にまつわる歴史遺産が多数残っています。

る菊池氏を中心とした争いが生じます。武家方と対立していた菊池氏は、しばしば北進を図って筑後へ進入し、博多大宰府に拠点を置く少弐氏と戦火を交えました。筑後川が流れる本市付近は北部九州支配の要衝として重要な位置を占めており、正平14年(1359年)に懐良親王、菊池氏、草野氏ら南朝方4万人と、少弐氏、大友氏ら北朝方6万人の軍勢がぶつかり、5千人もの兵が戦死したとされる「筑後川の戦い(大原・大保原の戦い)」が、現在の宮ノ陣町から小郡市南部一帯で行われました。日本三大合戦と称されるこの戦いの記憶は、現在も地域に根ざしており、「宮ノ陣」町は懐良親王が陣を置いたことからその地名がついたと伝えられています。南北朝の騒乱期には、筑後地域各所で合戦が繰り返され、耳納山地の尾根筋を利用した山城や、平野の湿地帯を利用した城館が多く築かれました。高良山の支城としての笹原城(後の久留米城)もこの時期に築造されたと伝わります。

中世末期の筑後地域は、豊前・筑後の大友氏や肥前の龍造寺氏、薩摩から北上してきた島津氏などの大名に翻弄され、在地領主は政治的混乱に陥りました。この状況を豊臣秀吉が九州平定により收拾し、その後の国割により、久留米城へ小早川(毛利)秀包が入城しました。小早川(毛利)秀包はキリシタン大名として知られ、両替町遺跡(城南町)の発掘調査では、教会と推定される建物跡とキリシタン関連遺物が出土しています。

また、室町時代の応永年間頃、市内には地藏板碑が多数作られています。南北朝の騒乱など、精神的な支えを必要とした時代を背景に、人々は地藏信仰に救いを求め、その想いは今日まで残されています。

6) 近世 「久留米の基盤形成」

戦国期の混乱を収束させた豊臣秀吉による九州平定の後、小早川(毛利)秀包の治世を経て、慶長6年(1601年)、関ヶ原の戦いの功績により、田中吉政が筑後国の領主として入封しました。吉政は柳河城(柳川市)を本城とし筑後国を治めましたが、2代忠政の病没後、田中家は改易*されました。その後、元和7年(1621年)に有馬豊氏が筑後8郡21万石の領主として、丹波福知山(京都府福知山市)から久留米城に入城し、以後、明治維新に至るまで、11代250年にわたって有馬氏が久留米藩を治めていきました。



久留米城古写真

江戸時代は、城下町や在方町*の形成、交通網の整備、産業振興など様々な事業が行われました。九州のクロスロードに位置し、水上交通の要である筑後川を擁した久留米藩では、交通網の整備が進められました。田中家による治世下では、本城のある柳川と久留米をつなぐ柳川往還や、安武町で分岐して御井町で豊前街道に合流する府中道が開発され、天領であった大分県日田市と長崎街道をつなぐ日田街道など、久留米城下を起点とする道路網も整備されていきました。また、江戸時代には筑後川に架橋が許されていなかったため、川を渡るために歩渡しや舟渡しが利用されました。交通の要地に舟渡しがあり、宮地渡し(宮ノ陣町)や神代渡し(山川神代)などは明治初期まで使用され、最後の舟渡しであった下田渡し(城

【用語解説】

*改易…大名の領地や家禄、屋敷などを没収されること

*在方町…中世や近世、商品経済の発展に伴って成立した町・集落

島町)は、平成6年(1994年)まで存続していました。主要な街道沿いには、府中(御井町)や草野(草野町)、原古賀(原古賀町)、上野(大善寺町)など宿駅が設置され、中でも府中は藩内で主要な宿駅として本陣(御茶屋)が設けられました。また、在方町も形成され、田主丸町は日田街道中道往還沿いに発達した在方町の一つで、現代にいたるまで周辺地域の産業や経済の中心地となっています。



柳原焼

産業の面では、19世紀頃に藩の財政が行き詰ると、財政再建のために米穀以外の「国産品」と称する商品作物の栽培が奨励されました。菜種や榲、藍がその代表例です。榲は実を絞って加工すると木蠟になるため、藩内各地で植林されました。藩は「榲方」という役を設け、農民に苗木を貸し与え、空地や荒地で実を収穫させました。その後、より蠟分が取れる榲の改良や蠟締機の開発などによって生産額が急増したことにより、藩財政を支える重要な産物となりました。商品作物の栽培が普及すると、酒造・製油・製蠟・製紙・製茶など様々な加工方法が進展しました。その一つが、久留米緋です。寛政11年(1799年)頃に井上傳に考案された久留米緋は、田中久重による緋模様の案出や機械の改良、大塚太蔵による絵緋の発明によって、評判が上がっていきました。藩内で生産された地場産物は、大坂など各地に送られましたが、これらの運搬や城下町の運営には、筑後川が大きな役割を果たしています。川港が置かれた恵利(田主丸町)・片ノ瀬(田主丸町)・荒瀬(宮ノ陣町)・瀬下(瀬下町)・住吉(安武町)・城島などでは商品が集められ、各地に送り出されていきました。

筑後川は肥沃な土壌をもたらし、水運には不可欠な存在である一方で、度重なる氾濫を起こし、藩や流域の人々には大きな被害を与えてきました。寛永4年(1627年)から慶応3年(1867年)まで240年間の洪水記録は、約150回を数えます。田中時代に久留米城下の洗切から瀬下にかけて蛇行部分を直線化させたことを皮切りに、直線化工事や堰、築堤、水芻や荒籠の設置など、治水工事が藩内各地で幾度も行われています。また、洪水多発地帯では、屋地盛や屋敷森、水屋、揚げ舟といった住民自身による水防対策が行われ、現在まで残されているものもあります。

江戸時代の本市では、多くの人や物が行きかう中で、文化面でも大きく発展しました。有馬家の歴代藩主は風流を好み、初代藩主豊氏は利休七哲の一人に数えられ、千利休から直接茶の湯の手ほどきを受けたと伝わります。6代藩主則維は、財政再建の一環として「朝妻焼」を興し、肥前有田の陶工をよび、磁器を生産しました。9代藩主頼徳は、風流大名として名高く、久留米城内に「柳原焼」を興しました。柳原焼で作られた茶陶は、現在の茶道界でも珍重されています。11代藩主頼成は、藩主別邸に「東野亭焼」の窯を興し、日用雑器を生産するなど生産方の事業の一端も担っていました。ほかにも、竹で編んだ籠に漆を塗り重ねた籃胎漆器は、明和年間(1764年～1772年)に久留米藩が塗物師の勝月平兵衛を京都から招へいたことに始まり、明治時代に塗師の川崎峰次郎や竹細工師の近藤幸七、茶人の豊福勝次によって作り出されました。同じ18世紀後半には、竹野郡唐島(現田主丸町志塚島)出身の諸九尼が俳人として活躍しています。

江戸時代には都市機能やインフラなどが整備されるとともに、産業や文化面でも大きく発展し、それらは現代まで引き継がれています。

7) 近・現代 「発展する筑後の中心都市久留米」

明治4年(1871年)、久留米藩は廃藩置県により久留米県となり、同年11月には柳河県・三池県と合併、三潞県が成立しました。当初の県庁は若津(大川市)に置かれていましたが、明治5年(1872年)に旧久留米藩の御使者屋跡(城南町)に移転しました。明治6年(1873年)1月には「廃城令」により久留米城が廃城、明治9年(1876年)9月に三潞県は福岡県と合併しました。

久留米市の誕生は明治22年(1889年)4月のことで、全国その他30市とともに全国に先駆けて市制が施行され、旧城下町を中心に久留米市となりました。その後、周辺市町と合併を繰り返しながら市域が拡大し、平成17年(2005年)2月には浮羽郡田主丸町、三井郡北野町、三潞郡城島町、三潞郡三潞町と合併し、人口30万人を突破しました。平成20年(2008年)には、九州で初めて県庁所在市以外で中核市となっています。

本市は「交通の要衝」「軍都」「ゴムのまち」「医者
のまち」「芸術のまち」「農業のまち」など、さまざま
な側面を持ちます。交通の面では、明治23年(1890
年)に博多-久留米間に九州鉄道が敷設され、市街
地を中心に馬車鉄道や軌道が盛んになりました。戦
後、国鉄となった久留米駅の乗客数は、九州内で博多、
門司に次ぐ3番目を記録しています。その後、車社
会を迎えると、昭和48年(1973年)に九州自動車
道が開通、現在は、九州のクロスロードとして重要な位置を占めています。

軍都としての歴史も古く、市の発展に大きく関わってきました。明治30年(1897年)に陸軍歩兵第48連隊が国分村(当時)に移駐すると、軍の関連施設が次々に建設されていきました。軍人やその家族が多数転入することで人口が増加、輸送のための道路網も整備され、商工業が発達する要因となりました。第一次世界大戦中には、青島で捕虜となったドイツ兵を収容する久留米俘虜収容所^{ふりよ}※(国分町)が設置されました。大正8年(1919年)12月3日、捕虜たちが久留米高等女学校において、全国で初めて市民へ向けてベートーヴェン交響曲第九番を演奏したことは広く知られています。しかし、軍都であったがゆえに、第二次世界大戦中の昭和20年(1945年)8月11日、無差別焼夷弾攻撃^{しょういだん}を受け、死者214名以上、重軽症者160人を出し、市街地の60~70%が焼失、市街地は灰燼^{かいじん}に帰しました。終戦後、久留米市管区司令部は解散式を行い、軍都としての歴史は幕を下ろしますが、現在でも陸上自衛隊幹部候補生学校や久留米駐屯地など自衛隊関係施設が多く所在し、市内には戦争を物語る「戦争遺跡」が多く残されています。

「医者
のまち」の出発点は、明治6年(1873年)に設立された好生病院に遡ります。明治



大川軌道とポッポ汽車



久留米俘虜収容所



空襲を受けた市街地

7年（1874年）の佐賀の乱の際には、官軍負傷者の療養所となったと言われ、その後、明治22年（1889年）には公立久留米病院（後の久留米市病院）、昭和3年（1928年）には九州医学専門学校（現久留米大学）が設立されました。平成28年（2016年）には、人口10万人あたりの医者数が全国の政令市、中核市で第1位となっています。

産業の面では、倉田雲平が明治6年（1873年）に創業したつちや足袋（現株式会社ムーンスター）、明治25年（1892年）に志まやとして創業し、石橋徳次郎・正二郎兄弟が成長させた日本足袋株式会社（現アサヒシューズ株式会社）、昭和6年（1931年）に石橋正二郎が設立した「ブリヂストンタイヤ株式会社」（現株式会社ブリヂストン）など、3社に代表されるゴム産業が久留米を代表する産業として発展していきます。また、筑後川によって形成された肥沃な筑紫平野で栽培された米や麦、野菜、穀物、植木苗木、果物、花き、畜産などは、関東・関西の大消費地へ出荷されるなど、九州を代表する農産物の供給地となっています。

このような環境の中、日本の近代画壇を代表する青木繁や坂本繁二郎、古賀春江といった画家や、詩人の丸山豊、作曲家の中村八大など様々な芸術家も輩出し、近年では、松田聖子や藤井フミヤ等の歌手や芸能人、スポーツ選手なども多数輩出し続けています。また、近年では、バイオベンチャーの創出や内外企業の集積を図り、アジアにおけるバイオ産業の拠点形成を進めています。

このように、本市は近現代以降、多様な側面をもつ都市として成長を続けてきました。その根底には、筑紫平野と筑後川に代表される恵まれた自然環境と、九州のクロスロードとして多くの人々が行き交う立地の好条件があります。これらを育んだ筑後川の流れとともに、今後も成長を続けていきます。

【用語解説】

※俘虜と捕虜…第二次世界大戦終了まで、日本では「俘虜」が公式用語であった。現在は「捕虜」が一般に使用される

牛島^{きんじ}謹爾（1864年～1926年）

牛島謹爾は、現在の久留米市梅満町に生まれました。漢学者になることをめざして東京に進学しますが、一転して英語を学ぶために渡米しました。アメリカではポテト農園経営の道に進み、苦労の末「ポテト王」と称されるほどの成功を収めました。また、在米日本人会の初代会長に就任し、大正15年（1926年）に亡くなるまで日米関係の発展に尽くしました。

(4) 文化的環境

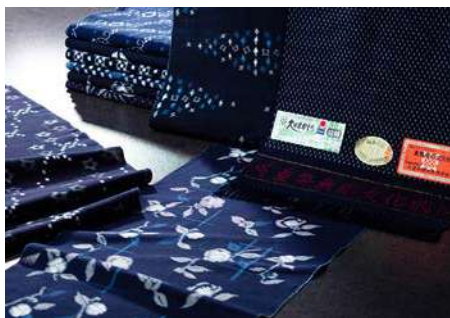
恵まれた環境の下で長い歴史を紡いできた本市では、先人たちの知恵と努力により多様な文化が生み出されてきました。伝統的な製造業、年中行事、食文化などは現在も市民によりが受け継がれており、多くの文化人が輩出され続けています。ここでは、その一端を本市の文化的環境として紹介します。

1) 伝統的な製造業

本市には、江戸時代から続く伝統的な産業があり、個人、企業、協同組合、保存会などにより、現在に受け継がれています。これらは、現代的なニーズを踏まえ新たな製品開発にも取り組んでおり、今も日常生活の中で使われ続けています。

12歳の井上伝が創始した織物「久留米絣」は、「手くびりによる絣糸の使用」「純正天然藍染め」「投杼の手織り織機による手織り」という伝統的な技術を、重要無形文化財として保護し、未来につなぐとともに、古くから製造工程の機械化にも取り組み、産業としての形態を現在まで維持し続けています。繊細な絵絣や、経緯双方の糸に絣糸を使用する経緯絣が特徴の久留米絣は、着物としてだけではなく、現代的なデザインの洋服や、バッグなど様々な商品に加工され、多くの人々に親しまれています。

また、江戸時代初期の有馬氏久留米入城に伴い、丹波から塗物師、瓦工が招来されたことで、「籃胎漆器」や「城島瓦」の礎ができました。竹細工に漆を塗って仕上げる「籃胎漆器」は軽く丈夫で、使うほどに味わいを増すため、長い年月にわたり日常に用いる器として愛用されています。「城島瓦」は、鬼瓦に代表される優美な光沢と格調高い姿形・耐久性に定評があり、九州各地の神社・仏閣や日本家屋などに使われ知られるようになりました。慶長6年(1601年)に城島町で製作され始めた和傘は、明治から大正時代にかけて全国2位の生産高を誇っていました。現在は、「城島町和傘保存会」がその伝統を伝えています。



久留米絣



籃胎漆器



城島瓦

2) 年中行事

筑後一の宮である高良大社は、古くから「年中行事六十余度」と言われるほど、多くの祭礼が受け継がれ、現在でも140あまりの祭礼が行われています。中でも、神輿が市中を練り歩く神幸祭じんこうさいや春の川渡祭かわたりさい(へこかきまつり)、秋の例大祭(高良山くんち)は、盛大に執り行われています。ほかに、1600年余りの伝統があり、日本3大火祭りの1つに数えられる大善寺玉垂宮の鬼夜や水天宮の春と夏の「大祭」、王子若宮八幡宮の五穀豊穡を祈願して花火を打ち上げる動乱蜂どうらんばち、伊勢天照御祖神社いせあまてらすみおやじんじやの無病息災・五穀豊穡を祈願して行われる「十五

夜さん大綱引き」、田主丸町の「虫^{むし}追^おい^{まつり}祭」など、数多くの祭礼が伝わっています。ほかにも、市内各地や寺社には風流や獅子舞、左義長（さぎっちょ）、相撲大会、粥占いなどの祭礼行事があり、保存会や同志会、振興会などの人々を中心に、地域コミュニティによって受け継がれています。

また、昭和47年（1972年）に始まった「水の祭典久留米まつり」は、市民が主役のサマーフェスティバルで筑後地域最大の祭典となっており、フィナーレに開催される西日本最大級の「筑後川花火大会」は、約45万人が来場します。この祭りで披露されるそろばん踊りは、久留米餅を製造する際の機織りの音を模しているとされ、市民に親しまれています。



大善寺玉垂宮の鬼夜



十五夜さん大綱引き



八丁島の御供納め



筑後川花火大会



動乱蜂



水の祭典久留米まつり

3) 食文化

川と大地の幸に恵まれた本市は、昔から豊かな食文化を育んできました。米、野菜、肉用牛、乳用牛の生産が県内1位であり、新鮮な食材があふれています。

筑後川周辺では、「コイ」や「ウナギ」、「ハヤ」に加え、日本では筑後川河口付近にしか生息しない「エツ」などの川魚が捕獲でき、筑紫平野のクリークでは「菱」が栽培されるなど、地域特有の食材にも恵まれています。広大な平野で生産された小麦は「久留米ラーメン」、「筑後うどん」などの麺類に加工され、上質な米と筑後川水系の清らかな水を利用した「日本酒」は、日本有数の酒蔵数を数えます。山間部では、巨峰栽培発祥の地である田主丸町で、全国初の「観光ぶどう狩り」が行われ、「柿」「いちじく」「梨」など、フルーツの産地としても知られています。また高良大社の秋祭り（高良山くんち）や北野天満宮のおくんちでは、かます寿司が食され、本市で捕れない食材も郷土料理となっています。

日本有数の焼とり店舗密度を誇る本市では、鶏だけでなく、豚、牛などの串のバラエティに富み、「久留米焼きとり」として知られています。「ダルム（豚の腸）」「ヘルツ（心臓）」などは医学生たちに名付けられたドイツ語由来の串で、「医者の子」の影響が食の中にも

見つけることができます。久留米の屋台街は福岡市の屋台街よりも歴史があり、旧軍都、商都としての特徴を背景として戦後に屋台が発展し、市民に密着する食文化として親しまれています。

近年では、久留米の食を通したにぎわいづくりを目指し、「B級グルメの聖地（まち）・久留米」を全国に向けて発信しています。



巨峰・柿



日本酒



エツ料理



久留米ラーメン



久留米焼きとり



筑後うどん

4) 市民活動

本市には、社会福祉や教育文化、環境、地域社会、保健医療、国際交流などの分野において、活躍する数多くの市民活動団体があります。本市も「久留米市市民活動を進める条例」を定め、市民と行政の協働のまちづくりの実現を目指しています。市内で活動する市民公益活動団体（NPO、ボランティア団体）は、まちづくりに関するもので109団体、学術・文化に関するもので57団体（令和3年（2021年）1月時点）を数え、市内各地で地域に伝わる歴史や文化を守り、活かしていく市民活動も活発に行われています。

市内に所在する歴史遺産のうち、指定等文化財の保存・活用に取り組む保護団体は14団体を数えます。その他の歴史遺産に関しても、「かっぱ伝説」を活かしたまちおこし、ホテルの舞う清流と森の再生活動、「柳坂曾根のハゼ並木」や「浅井の一本桜」など、地域の歴史遺産を守り活かす活動、三潞・城島地区での案内板を作成する活動などに取り組む様々な市民団体が活躍しています。しかし、近年は少子高齢化などの社会情勢の変化の中で、活動の維持や存続が危惧されており、課題となっています。



大塚古墳歴史公園



くじらの森



柳坂曾根の櫨並木



みのう校区山苞まつり



地域によるくじらの森の保全



柳坂ハゼ祭り

5) 芸術

本市は、自然豊かな土壤に恵まれ、美術や音楽、芸能等の様々な分野で多彩な人材を多数輩出しています。美術の分野においては、明治以降、青木繁、坂本繁二郎、高島野十郎、古賀春江など日本の近代洋画を代表する画家を生み出しています。株式会社ブリヂストンの創業者である石橋正二郎により本市に寄贈された石橋美術館は、平成28年（2016年）に久留米市美術館に移行し、多彩な美術ジャンルの作品を紹介する展覧会が開催されています。ほかにも、金工作家の豊田勝秋や詩人の丸山豊、作詞家の中村八大、全国で活躍する芸能人やスポーツ選手など、様々な分野において数多くの人材を輩出し続けています。

市民活動においては、書道や茶道、華道、琴などの文化活動、合唱、吹奏楽、オーケストラなどの音楽公演といった、文化・芸術に関する活動も盛んで、地域のコミュニティセンターにおいても文化・芸術に係る各種サークルが結成され、文化祭などにおいてその成果が発表されています。平成28年（2016年）には文化交流施設として久留米シティプラザが開館し、市民にとって演劇や音楽、ダンスなどの芸術に触れる機会がより身近になっています。



坂本繁二郎生家



久留米市美術館



久留米シティプラザ

6) 郷土の人物

交通の要衝として発展してきた本市には、「人」「モノ」「情報」が行き交い集積されてきました。その結果、政治や軍事、芸術、スポーツなど多くの分野において活躍した偉人や文化人を輩出しています。

原始から現代まで時代を問わず、全国に知られる歴史上の人物から郷土にとってかけがえない人物まで、立地を生かした政治や産業、豊かな自然をテーマにした芸術など、多種多様な人々の活躍が、本市の歴史文化の土台となっています。

表 郷土の人物

	政治・軍事	思想・宗教	土木・建築	商業・産業	ものづくり	学問・医療	芸術・文化	スポーツ
原始	水沼君	景行天皇						
古代	筑紫君磐井 道君首名 葛井連大成							
中世	草野氏 懐良親王 西牟田氏	神子栄尊 聖光上人 金光上人						
近世	立花闇千代 小早川秀包 田中吉政 有馬豊氏 稲次壱岐 稲次因幡	良寛 麟圭 寂源 古月禪師	丹羽頼母 草野又六	笠九郎兵衛 石原為平 手津屋正助	桂 永寿 青木清秀 坂本元蔵 井上 伝 田中久重 大塚太蔵 川崎峰次郎 小川トク	松下元芳 緒方春朔 有馬頼僮 樺島石梁 船曳鉄門 宇治田雲嶂 西 以三 矢野一貞 井上昆江 薬師寺冬堂 梅野多喜蔵 工藤謙同 拓植善吾 武田巖雄 戸田友次郎 江碕 済 元田作之進 星野房子 浅野陽吉 本間一郎 黒岩萬次郎 厨幾太郎	三谷等哲 塩足市山 諸九尼 有馬頼徳 富士松紫朝 森 三美 青木 繁 坂本繁二郎 吉田 博 高島野十郎 古賀春江 豊田勝秋 藤田 進	犬上郡兵衛 加藤田平八郎 津田一左衛門 小野川才助 松崎浪四郎 中村半助
近代	殉難十志士 水野正名 林田守隆 内藤新吾 三谷有信	高山彦九郎 真木和泉守 権藤成卿	青木牛之助 森尾茂助	福田忠太郎 越智通重 倉田雲平 岩熊莊太郎 石橋徳次郎 日比翁助 牛島謹爾 塚本榮太郎 岡幸三郎	赤司喜次郎 國武喜次郎			
現代	宗像小文太 有馬頼寧 倉富勇三郎 石井光次郎 檜崎 渡	権藤成子	梅野 実 菊竹清訓	上村政雄 江島三郎 石橋正二郎 倉田泰蔵	松枝玉記	本間四郎 宮入慶之助 ハンター博士	丸山 豊 中村八大 松田聖子 藤井フミヤ	納戸徳重 円谷幸吉 坂口征二 中野浩一

7) 校歌

市内の小学校では、校歌の中で豊かな自然や郷土の歴史がうたわれています。自然に関しては、川や山、平野などがうたわれ、中でも筑後川を中心とする「川」は47校中24校、耳納山などの「山」は23校と多くの校歌に見られます。校区によっては「国府」や「城」、^{くましろ}「神代橋」など郷土の歴史に関係する言葉も見られます。

また、多くの校歌が本市にゆかりのある人物によって作詞・作曲されています。特に、医師で詩人の丸山豊は、小学校校歌だけでも13校、それ以外を含めると25校の校歌の作詞を手掛けています。筑後川や耳納山地に代表される水と緑に囲まれた環境や、先人によって築かれてきた歴史の一端が校歌として歌われ、市民の心に刻まれています。

【郷土の自然がうたわれた小学校校歌の一例】

<p>久留米市立荘島小学校校歌</p> <p>作詞 丸山 豊 作曲 團 伊玖磨</p> <p>高良の山なみ 朝日にはえて 風は緑だ 久留米の町の われらが荘島 たたえよ荘島 元気に学んで 正しく進む われらのひとみを 光よてらせ</p> <p>筑後の流れは ゆたかにめぐり 風は緑だ 久留米の町の われらが荘島 たたえよ荘島 元気に学んで 正しく進む われらの足音 平野にひびけ</p> <p>未来を背負うて 希望にもえて 風は緑だ 久留米の町の われらが荘島 たたえよ荘島 元気に学んで 正しく進む われらの覚悟は 今こそかたい</p>	<p>久留米市立柴川小学校校歌</p> <p>作詞 本間 四郎 作曲 中村 八大</p> <p>手に手つないで かけよう空へ 耳納の山の みどりのはだが 大きくつつむ ふところ 心豊かな 人づくり ※ぼくの わたしの みんなの母校 ラララ 柴川 柴川小学校 ※</p> <p>手に手つないで かけよう空へ 筑後の川の あおい川面 しぶきをあびて 太陽をあびて 体じょうぶな 人づくり ※（くりかえし）</p> <p>手に手つないで かけよう空へ 植木の波の さざなみぬけて 白くたたく 学舎で 知識豊かな 人づくり ※（くりかえし）</p>
---	--

丸山豊（1915年～1989年）

丸山豊は八女郡広川町に生まれ、その年に久留米市日吉町へと移り住みました。九州医学専門学校（現：久留米大学医学部）に入学し、戦時中は軍医を務め、戦後は医師として働く傍ら、詩集『孔雀の寺 詩集』の出版や詩誌『母音』の刊行を行ったほか、九州朝日放送の取締役や久留米市教育委員も務めるなど多岐にわたり活躍しました。合唱組曲『筑後川』（團伊玖磨作曲）や、久留米市内の幼稚園から大学まで、25校の校歌を作詞したことで広く知られています。